方向
第一七一号　一九九五年五月三〇日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

李賀歌詩編

（訳注稿　六）

原田憲雄

（一〇二三）

緑紙祈祷文　―呉道士の夜祭の為の作―

緑章封事　為呉道士夜醮作

〔緑章封事　呉道士の夜醮の為の作〕　・道教で行なう除災招福の夜祭を「夜醮」といい、そのとき道士（道教の神官）の読む祈祷文は、緑の藤紙に朱文字で書くから「緑章」といい、緑章のうち密封して他の人には秘密にするものを「封事」という。日本の神道には道教の風習制度が多く取り入れられているので、祭のとき神主が読む祝詞から類推すればいい。「封事」は、もと臣下が天子に意見具申するとき、他に漏れることを防ぐため始まり、それが道教に取り入れられた。このときの神主にあたるのが、「呉道士」であり、夜祭の封事の文章を李賀が代作したので「夜醮の為の作」である。秘密といっても代作し、詩集のなかにいれているのだから、その秘密は形式的なものになっていたのであろう。鈴木は「道士のたのみ事と共に自己の祈願を添えている、これは長吉のほうからたのんで、ついでにいっしょに祈ってもらったものとみえる」という。

（一〇二三）

○一　青冥扣額呼宮神

青い冥色の祭の衣で額づいて宮神呼べば

玉狗のまもる天門が　カラン　カランと開かれる
溪のほとりはいちめんに石榴の花が咲き満ちて
巫女たちが花を洗えば白雲も真紅に染まる
緑の紙にしたためた秘密祭文　天帝に伺いもうす
長安六街　蹄にまかせて暴走のやからがあふれ
空わたる風は過熱して　大気はどこも清潔でなく
はっぴ鉢巻で働く民草　塵や芥のように斃れる
貴族や財閥の屋敷街には　千台の馬車が日々鳴り響き
揚雄のような文人の家はさびれて評判もない
願わくは　漢代の戟を魂寄せに亡霊まねき
遺恨の骨の　墓穴に朽ちるなきよう　守らせ給え

〇一〔青霓　額を扣いて　宮神を呼ぶ〕　・青霓　青い霓色の祭衣を着た道士。霓を全唐詩の注が「猊」とする。　・扣額　額づくこと。　・宮神　祠宮の神。

〇二〔鴻龍として　玉狗　天門　開く〕　・鴻龍　カランカランという音。　・玉狗　玉製の狛狗。

〇三〔石榴　花發いて　溪津に満つ〕　・石榴　ザクロ。この句は神域の情景。

〇四〔溪女花を洗えば白雲を染む〕　・溪女　巫女のこと。溪を毛氏本などの注に「漢」とする。この句は巫女が神前に花を捧げることを歌う。

〇二　鴻龍玉狗開天門
〇三　石榴花發滿溪津
〇四　溪女洗花染白雲』
〇五　緑章封事諮元父
〇六　六街馬蹄浩無主
〇七　虚空風氣不清冷
〇八　短衣小冠作塵土』
〇九　金家香術千輪鳴
一〇　揚雄秋室無俗声
一一　願携漢戟招書鬼
一二　休令恨骨填菖里』

○五〔緑章の封事　元父に諮る〕　・諮元父　気の根源である天帝におたずねする。以下が祈祷の内容。ただ次の三句は難解とされ、解釈も分岐するが、今のわれわれには説明もいらぬ、拙訳のような状態を歌っているのではないか。

○六〔六街の馬蹄　浩として主無し〕　・六街　長安城中の左右の六街。　・浩無主　浩は、広大隆盛のさまだが、主が無いのは、統制がなく、わけのわからぬことである。

○七〔虚空の風気　清冷ならず〕　・虚空風気　風を朝鮮本は「雲」とする。　・清冷　冷を錦囊集などが「冷」とする。

○八〔短衣小冠　塵土と作る〕　・短衣小冠　庶民のことを指すのであろう。

○九〔金家の香術には千輪鳴るも〕　・金家　漢代の貴族に金、張、許、史の四大族があり、中でも金家が栄えた。金家の祖は金日磾で、匈奴の出身だが、漢に降り、武帝に認められ、忠誠であったため、その子孫は漢人の貴族を凌いだ。唐代には外国人の将軍で高位につき権勢を振るうものが多かったので、漢代の「金家」でそれらを暗示したのであろう。　・香術　豪壮華麗な屋敷町。

一〇〔揚（楊）雄の秋室　俗声無し〕　・楊雄　楊を錦囊集などが「揚」とし、それがよい。揚雄（前五三―後一八）字は子雲。成都（四川）の人。前漢末の最も優れた文学者だが、四十を過ぎて長安の都に出たとき就きえた職が執戟郎、戟をもって宿直するガードマンのようなものであった。その著作は一部の有識者には尊重されたが、ひろく知られるようになったのは死後四十年たってからであった。　・秋室　さびしい部屋。　・俗声　世俗の評判。

一一〔願わくは　漢戟を携え　書鬼を招き〕　・死者の魂を招くには、生前の持ち物を持って名を呼ぶの

が、中国の古例だった。揚雄は執戟郎だったからその戟を魂寄せに使うのだ。　・書鬼　文学者の亡霊。
三〔恨骨をして蒿里に填めしむるを休めよ〕　・恨骨　恨みを抱いて死んだ人の骨。　・蒿里　ヨモギの生い茂った墓場。

（一〇二四～一〇三六）

十二月楽辞ならびに閏月

―河南府選抜試験の答案―

河南府試十二月楽辭并閏月

〔河南府試　十二月楽辞并びに閏月〕　・河南府試　長安で行なう文官試験を受ける資格を得るための選抜試験が、ほぼ毎年、各地方の長官の主宰で行なわれた。これを貢挙という。李賀が受けたのは河南府が主催するもので、その長官すなわち府尹は房式かと思われるが、あるいは郗士美だったろうか。府試を受けるよう勧めたのは韓愈である。賀の最初の韓愈訪問については王定保「唐摭言」（〇〇〇三）張固「幽閑鼓吹」（〇〇〇四）が伝え、その後者は「雁門太守行」（一〇一七）で触れた。愈は八〇六年、憲宗の元和元年六月、江陵府法曹参軍から権知国子博士に転じ長安に還った。権知国子博士は、国立大学の助教授といった職である。八〇七年、東都分司（洛陽勤務）となり夏の末に入洛した。賀が詩集を献じて愈の弟子となったのはこの時であろう。まもなく賀の父晋肅が亡くなり、賀は三年（実際は二七か月）の喪に服する。愈は八〇八年、国子博士（教授）となり、八〇九年、都官員外郎に転じ、八一〇年冬、河南県令（市長）となった。この間ずっと洛陽勤務だった。愈が県令となったころ、たぶん

賀の服喪は終わり、愈の勧めで河南府試をうけたのであろう。　・詩の題の「河南府試」は河南府試における答案、の意。楽府詩集には、この四字がない。　・十二月樂辭并閏月　一年を月毎に一首、これに閏月一首を加えた、雑曲のための歌詞。楽府詩集では「近代曲辭」すなわち隋、唐両代に創作された新曲だという。もっとも晉代の楽府に「月節折楊柳」という題で一月から十二月まで、さらに閏月をそえた十三首があり、唐の袁暉に「正月閨情」「二月閨情」「三月閨情」「七月閨情」がある。これも、もとは十二月と閏月をうたったもので、他は失われたのであろう。「閏月」があるので、閏月をふくまぬ八一〇年の作ではあるまい、という説があるが、杓子定規にすぎ、それなら「月節折楊柳」も閏月のある年に作ったのか、という議論になろう。試験の答案だから、受験者のすべてがこの題で作ったはずだが、現存するのは賀の作だけである。辭を錦囊集は「詞」とする。意味は同じ。

・拙稿「十二月楽辭」（李賀論考）参照。

（一〇二四）正月

正月

楼に上って春を迎えると新しい春が帰ってくる　〇一 上樓迎春新春歸

ほのかな黄色が柳について宮城の水時計の遅いこと　〇二 暗黃著柳宮漏遲

ふわふわと淡い靄が野の姿をもてあそび　〇三 薄薄淡靄弄野姿

寒い緑がかすかな風に短い糸を生やしはじめる　〇四 寒綠幽風生短絲

あかつきの錦の床によこたわる玉の肌は冷いやりと　〇五 錦牀曉臥玉肌冷

露をおびた瞼は開かず朝の闇にむけたまま　〇六 露瞼未開對朝暝

都大路の柳の帯はまだ折るにしのびない
けれども《いつかは花菖蒲》むすばれようさ

○七 官街柳帯不堪折
○八 早晩菖蒲勝綰結』

○一〔楼に上って春を迎うれば　新春　帰る〕　・迎春　礼記に「立春の日、天子親ら三公九卿諸侯大夫を帥い、以て春を東郊に迎う」（月令）というように、迎春は、もと天子の行なう国家の行事だった。賀の作も一部の注釈者がいうように宮中のこととも読めないわけではないが、作者、あるいはその人を想像させるような青年が、春を迎えようとして楼に上ると、新春が、東方から光のように輝かしく帰ってくる、……と見てよく、それがまたこの作品の新しさであろう。　・新春　王褒「細柳新春に発く」（別陸子雲）　・この句、一本に「正月上楼迎春帰」とすると王琦がいうが、よくない。

○二〔暗黄　柳に著いて　宮瀾　遅し〕　・暗黄著柳　唐代には街路樹に槐や柳が植えられた。この詩が推定通り八一〇年作ならばその元旦は陽暦の二月八日。前のとしに葉を落とした柳の繊い枝々に、ほんのかすかながら、黄色いものが、ぼおっとかすみはじめていたであろう。そのかすんで暗さを帯びた黄色いものが「暗黄」である。これは賀の造語ではないだろうか。　・宮瀾　都内の標準時計とされた皇城内の水時計。時間の推移に敏感だった賀はしばしばこの時計を歌う。　・遅　急に春めいて日脚ののびてきたことを、水時計の滴りの遅くなったためかと、ひねって言うのだが、春の盛りを待ち遠しく思う心も含まれ、末の二句への伏線となっている。

○三〔薄薄たる淡靄　野姿を弄す〕　・薄薄淡靄　うすうすと淡くたなびく靄は、新鮮な野の姿態をまさぐっているように見える。

○四〔寒緑　幽風　短糸を生ず〕　・寒緑幽風　寒ざむとした緑に、かすかに風がわたるのを、よく見ると、短い糸のような若草が萌えそめている。風を楽府詩集などが「泥」とするが、よくない。・三、四句で、作者の筆は、早春の野を描きながら、そこにうら若い女性のイメジを重ねている。アルチュール"ランボーの、「河辺の野に臥すとき　ひとは感じる／大地が　年ごろで　血のみなぎっているのを」(Soleil et Chair) ほど奔放ではないが、「大きな樹々が／玻璃窓」(Première Soirée) の中を覗き込むような「無遠慮な」まなざしが感じられる。そうして、ただよう靄がしのびこんだ窓の中で見たものは、

○五〔錦牀に暁臥して玉肌冷ゆ〕　・錦牀暁臥　錦の床に横臥して、玉の肌を、ひいやりと朝の空気にむきだしている女体である。牀を錦嚢集は「床」とするが、俗字。肌を錦嚢集は「飢」とするが、誤り。

○六〔露瞼　未だ開かず　朝暝に対す〕　・露瞼未開　露をおく花のようなその瞼は、まだ開かず、朝やみにむかって、匂うている。これもまた「わたしの大きな椅子にかけて／半ば裸で　彼女は両手を組んでいた」(Première Soirée) との間にほとんど隔たりがない。瞼を宋蜀本などが「臉」とし、暝を蒙古本などが「瞑」とする。

○七〔官街の柳帯　折るに堪えず〕　・官街柳帯　賀の詩中の青年の眼は、官街すなわち都大路の、柳帯、街路樹の柳を見おろす。その樹の姿と女体の幻像とは、なお分かちがたくもつれあって、かれの手はそこに向かって伸ばされる。だが、まだ欲望にめざめぬ女に似た、幼い枝は、さすがに折りとるに忍びない。かれが西方の人なら「愛のおのずから起こる時まで殊更に喚起し且つ醒すなかれ」(ソロモンの雅歌) の声をきいたであろう。あるいは「もし華いまだまさに敷くべからずんば、すなわちまた強いて開

かざるがごとし」（大智度論、三）の句を念じたろうか。袁暉「砌を遶って梅折るに堪う」（正月園情）

〇八〔早晩　菖蒲　縮結するに勝えん〕　・早晩菖蒲　はっとして手をひいた青年は、さわやかな朝風に無心にそよぐ柳にむかい、明るい表情にかえって、こう言いかける「なんといっても、もう春だ。やがて、遠くない日に、あの菖蒲が結ばれるように、わたしとおまえのちぎりも、かたく結ばれるだろう」と。早晩は俗語で「いつか」という意。賀のころ、「早晩菖蒲……」といった歌が民間で流行していたのだろう。縮結は輪にして結ぶこと。

・この詩は、第五句と第七句で脚韻が換わる。そのことによって、初句から第四句までが現実、第五と六句が夢想、第七と八句でまた現実にかえることを示している。

二月

酒をくむ　採桑のみなと
宜男草が芽生え　蘭が人に笑いかける
蒲の葉は交叉する剣　風は薫る香料みたい
ぐったりした胡地の燕が　盛りを過ぎる春を怨めば
薔薇のとばりにまつわる鶯は　緑の塵となる
金翅鳥のかんざし　高い髻　夕暮れの雲に愁え
さっと起って舞う　真珠のもすそ
みなとの送別に　《流水の曲》をうたえば

（一〇二五）二月

〇一 飲酒採桑津
〇二 宜男草生蘭笑人
〇三 蒲如交劒風如薫
〇四 勞勞胡鶯怨酣春
〇五 薇帳逗烟生緑塵
〇六 金翅峨髻愁暮雲
〇七 沓颯起舞真珠裙
〇八 津頭送別唱流水

酒くむ人の背な寒く　南山が　死ぬ

〇九　酒客背寒南山死』

〇二〔酒を飲む　採桑の津〕　・飲酒　楽府詩集などが「二月飲酒」とするが誤り。　・採桑津　郷寧県（山西）にあり、養蚕の盛んな土地で、晋代に「採桑度」という題の民謡が生まれ「春のなかばに桑摘めば、ひらひらひらひら緑の葉。枝をよじって梢に上れば、引き裂けましたきれいなスカート」（採桑盛陽月。緑葉何翩翩。攀条上樹表。牽壊紫羅裙）など七首が現存する。採桑度は採桑の渡しすなわち採桑津で、山西から陝西への黄河の港として古くから知られた。そこで酒を飲むといえば、旅立つ人と送る人が、別れの酒を酌み交わすのだ。

〇三〔宜男草生じ　蘭　人に笑う〕　・宜男草　萱草とも諼草ともいい、和名ワスレグサ。これを食べると憂いを忘れるといい、妊婦が帯につければ男の子を生むと伝え、宜男草とも呼ぶ。この詩の題は「二月」すなわち仲春で、周礼に「男女を会わしむ」という婚嫁の適期。そこにこの草が選ばれたのは、いま酒をくむ人たちの間に、子を求めるまでに突き進んだ恋情のあることを歌おうとしたからにちがいない。曹植「君子楽に耽れば、好んで琴瑟を和す」（宜男花頌）　・蘭笑人　笑いかける女性の婀娜つぽいまなざしがこぼれる感じである。

〇三〔蒲は交剣の如く風は薫るが如し〕　・蒲如交劒　ぎっしり繁った蒲の葉むらに、風が吹きまぐれ、厚くかたい葉が、剣のようにキラキラ輝き、音たてているさまが、視覚と聴覚とに鮮やかにひびく。この句には採桑度と同じ時代の「抜蒲」という二首の民謡が伏せてある。その一首「桂の浜を朝出して、桑の畑で昼休み。ぬしと一緒に抜いた蒲、束にもならぬ日暮れどき」（朝発桂蘭渚。昼息桑榆下。与君

同抜蒲。竟日不成把）どんな蒲をぬいていたのやら。交劒を楽府詩集の注に「絞刀」とするが、誤り。

○四〔勞勞たる胡燕　酣春を怨む〕　・勞勞胡燕　前の句の輝きとざわめきが、別れを前にしたこいびとたちのたわむれだとすれば、やがてものうい疲れをよび、強いてつとめた胡燕の羽の動きにも、さかりをすぎた春をかなしむ痛たいたしさが、あらわれる。勞勞には、古詩「手を挙げて長く勞勞」（為焦仲卿妻作）のように別れを惜しむ意のあること、いうまでもない。胸の斑が黒く声の大きいのが胡燕だという。胡というからには流行の胡風の化粧をしていたのか、化粧のみでなく、女が胡の人であったのかもしれぬ。胡燕を錦囊集は「鶯燕」とするが。誤り。燕につていは凡例参照。　・酣春　一般に春の真盛りのことをいうのだが、ここではその盛りが過ぎようとするデリケートな時期を指す。

○五〔薇帳　烟を逗めて　緑塵を生ず〕　・薇帳　薇は普通、ノエンドウを指すが、ここのは薔薇であろう。謝朓、梁の簡文帝、元帝など賀の愛読した人たちが挙って歌い、また胡風のモダンな女性にはそのほうがふさわしい。薇帳は、薔薇の花をつけた叢がつくるカーテン。流れる靄がよぎると、繊枝が織りなす網目に、こまかな水粒がむすんで、緑の塵がうっすらかかったようだ、というのである。帳は室内では寝台を覆うもの。ここは野外だから、薔薇を帳としたのだ。　生緑塵を楽府詩集の注は「香緑昏」一全唐詩の注は「香霧昏」とするが、よくない。

○六〔金翅　峨髻　暮雲に愁う〕　・金翅　インド神話の鳥garuda。迦楼羅と音訳し、羽は金色で、須弥山の中腹に住み、龍を食べ、八部衆すなわち仏法を守護する神のひとつ。ここのはその模様のかんざしをいう。宋蜀本などは「金翹」とする。それなら鳥の長い尾にかたどった金の髪飾り。　・峨髻　高いまげ。峨は底本では「蛾」とも読めそうで、北宋本は「蛾」としているが、峨がよい。　・愁暮雲　夕

暮れの雲に愁うのは、別れの時が迫るからだ。

○七〔杳颯　起って舞う　真珠の裙〕　・杳颯　杳は水の湧き溢れるさま。颯は風がさっと吹くさま。杳颯は二つを合わせた賀の造語で、愁いを振り切るように立ち上がり、真珠をちりばめたもすそを翻して舞う女性の、心理と行動を写して余すところがない。北斉の武成帝は愛する胡后のために真珠の裙袴を作った（拙稿「馮小憐」参照）が、胡燕のような女性のスカートには、これまたぴったりの表現だろう。

○八〔津頭の送別に流水を唱う〕　・流水　曲名で、楽府詩集に「隴頭流水歌辞」三首がある。その第一首「隴頭を流るる川は／ただよいて西へぞくだる／あわれ　わが身ひとつ　嬢野をぞさまよいなんに」（隴頭流水。流離西下。念吾一身飄嬢野）さびしく、かなしい曲である。唱える李賀詩中のひとの歌声もまた、去ってはかえらぬ逝く水のように、かなしい。

○九〔酒客　背寒く　南山　死す〕　・酒客　いくたびも杯を交わし酒を飲んだ後にもかかわらず、酒は体をあたためることなく、かえって背中のあたりがぞっくり寒く、女性の歌と舞いがおわったとき、うち見る南山の、死んだようなその色。永遠の生命にたぐえられる南山も、別れの悲しみには死ぬのか。

・南山　梁の武帝「南山君が為に老ゆ」（邯鄲歌）なお「詠懐二首二」（一〇一三）参照。

・中国の詩は一句一句が独立しながらも、二句一対であることが多い。大部分の詩の句数が偶数であるのは、これによる。ところが賀の詩は九句の奇数である。第一句が五字であることは、他の句が七字であることに対して、欠落の感を与える。欠落は他の欠落に出会うことによって全体の均斉を取り戻す。この詩では、他の句は隣の句と結びあい、初句は欠落を補う相手を見いだせずに第七句まで進む。七、八句もそれだけでは結合充足しているが、六句までとは韻が換わったことで、全体のパタンの中では、

一種の欠落感を与えずにはおかぬ。八、九句が、まえの六句と対応して安定するためには、更に二韻かさねなくてはならない。それを九句で打ち切ることによって、初句の欠落が求めた相手を見いだし、あたかも澱んだ水が障礙を除かれてたちまち流下し、生きあぐねた絶望が死によって急に解決を与えられるかのように、この詩は充足し、同時に終結する。十二月楽辞のうち、この詩の他に、「四月」「六月」「十月」「閏月」が奇数句である。「六月」と「閏月」は初二句が三字。あるいは一句を両断したものとみてもよいが、七字句でない点「二月」と同様、詩中に欠落をもつ。ただこの両詩は、ふたつの三字句が連なるため補われて、「二月」ほど特異な効果をもたない。「二月」は、外形の均整を破ることによって内面的により高い表現に到達した作品だ。

三月

東方から風が来て　眼に満ちる春
花の都に　柳は暗く　人々を愁わせる
いくえの宮殿の　深い館に　竹風おこり
さみどりの舞姫の衿は　浄らかで水のようだ
光る風　百里あまり　蕙蘭をひるがえし
あたたかい霧　雲を駆り　天地をうつ
軍装の宮妓ら　眉を浅くはき
ゆらゆらと錦の旗　夾城の路に暖かく

（一〇二六）三月

〇一　東方風來滿眼春
〇二　花城柳暗愁殺人
〇三　複宮深殿竹風起
〇四　新翠舞衿淨如水
〇五　光風轉蕙百餘里
〇六　暖霧驅雲撲天地
〇七　軍裝宮妓掃蛾淺
〇八　搖搖錦旗夾城暖

曲水に漂う香り　去って帰らず
梨の花　落ち尽くし　さながらに秋の苑

〇九　曲水漂香去不歸
一〇　梨花落盡成秋苑』

〇一〔東方　風來って　滿眼　春なり〕　・滿眼　目に入るものすべて。
〇二〔花城　柳暗く　人を愁殺す（愁幾人）〕　・花城　花の咲き満ちた城市。　・柳暗　暗を楽府詩集の注は「禁」とするがよくない。　・愁幾人　このままなら「幾人を愁えしむるや」となるが、ぴったりしない。幾を錦囊集などに「殺」とし、それがよい。殺は動詞の意味を強める接尾辞で、愁殺は、悲しませる。古詩「白楊悲風多く、蕭蕭として人を愁殺す」
〇三〔複宮　深殿　竹風　起こり〕　・複宮深殿　重複して深遠な宮殿の意。屈原「堂を経て奥に入れば、朱塵と筵とあり」（招魂）殿を錦囊集などが「凝」とするが誤り。　・竹風　竹を渡る風。
〇四〔新翠の舞衿　淨きこと水の如し〕　・舞衿　呉正子は、竹の形容とし、王琦は、舞姫の衿と見るが、二つのイメジが重なっている。これも賀の詩の特色で、重なり合った意味が感覚上の違和を呼ぶか否かが表現の成否の分れ目だ。　・淨　楽府詩集が「靜」とするが、よくない。
〇五〔光風　蕙を転ずること　百余里〕　・光風　屈原「光風　蕙を転じて、崇蘭を氾わす」（招魂）その注に「光風は雨やみ、日出でて風ふき、草木光あるなり。転は揺なり」という。　・蕙　蕙蘭。葉は草蘭に似てやや細長く、暮春に花ひらき一茎に六、七花をつける。　・百余里　屈原「目千里を極めて春心を傷ましむ」（招魂）
〇六〔暖霧　雲を驅って天地を撲つ〕　・撲天地　熱気が雲を走らせ天地を打つようだ。撲を覆うの意に

解する説もある。

○七〔軍装の宮妓　蛾を掃いて浅く〕　・軍装宮妓　中国では古来女性は騎乗しなかったが、北朝では胡俗に従って試みる者が出、唐代には玄宗朝に楊貴妃の姉の虢国夫人が好み、軍装の宮妓の出現したことが杜甫の「哀江頭」などで知られる。　・蛾　蛾眉、すなわち女性の美しい眉。蒙古本が「娘」とするが、誤り。杜甫あるいは張祜の作という「虢国夫人」に「淡く蛾眉を掃く」　・淡掃は淡彩と同じ。

○八〔揺揺　錦旗　夾城　暖かなり〕　・夾城　長安の大明宮から曲江の芙蓉園にいたる行幸路。七三二年、玄宗がはじめて開き、七九六年に広げ、八〇七年、設備の一部を新築した。

○九〔曲水　漂香　去って帰らず〕　・曲水　曲江。漢の武帝が宜春苑を築き、唐の玄宗が芙蓉園を設け、長安南郊のもっとも美しい遊園地であった。　・漂香　ただよい去る香しい水泡であろう。漂を宋蜀本などは「飄」とする。

一〇〔梨花　落ち尽くして　秋苑と成る〕　・秋苑　秋を楽府詩集の注が「愁」とするが、よくない。

・この詩の初、二句は序曲、三から六句までが禁城中の、七から結句までが曲江での遊宴を歌い、全体が楚辞の「招魂」の替え歌のような感じがする。春は魂の動揺放散しやすい時期なので、招き返すために、外部が厭うべく内部が楽しいことを歌うのが「招魂」の主題なのだが、賀の「三月」では深殿の舞衿までがさまよい出る風情で、曲水も「みそぎ」のためともとれようが、軍装ではいかがなものか。あげくが去って帰らずでは、魂魄離散であり、それが梨花落尽なのかもしれぬが、「招魂」とはまるで反対である。この詩を諷諭の作と見る注釈があるのは、あるいはそんなところに眼をつけてのことであろうか。それぞれの句は新鮮で、殊に結句が秀抜だが、主題がつかまえにくく構成が緊密を欠くようだ。

四月

（一〇二七）四月

曉涼しく　暮れ涼しく　樹は車の傘みたい
千万の山は　濃緑で　雲のあなたに鮮やかだ
かすかに香気をおびる雨　むんむん青く
じっとり厚い葉　むらがる花　曲がりかどの門を照らす
金色の池　しずかな水　碧玉のさざなみ揺れ
老いた景色はおもく沈み　驚き飛びたつものもない
堕ちたくれない　残る蕚　ほの暗く　ちぐはぐに

〇一　曉涼暮涼樹如蓋
〇二　千山濃緑生雲外
〇三　依微香雨青氛氲
〇四　膩葉蟠花照曲門
〇五　金塘閑水揺碧漪
〇六　老景沈重無驚飛
〇七　堕紅殘蕚暗參差

〇一〔曉涼　暮涼　樹　蓋の如し〕　・曉涼暮涼　涼を宋蜀本などが「凉」とする。俗字。盧照鄰「初晴曉涼を帯ぶ」（至陳倉曉晴望京邑）　・樹如蓋　西京雑記「樹あり、直上す。百尺、枝なし。上は蔡条を結んで車蓋の如し」

〇二〔千山　濃緑　雲外に生かなり〕　・千山濃緑　李華「雨は万木を濯いて鮮やかに、霞は千山を照らして濃かなり」（寄趙七侍御）。韓愈「濃緑画新たに就る」（南山詩）

〇三〔依微たる香雨　青　氛氲〕　・依微　かすか。韋応物「寒樹依微たり遠天外」（自鞏洛舟行入黄河）　・香雨　香気を帯びた雨。沈約「香雨宵に墜つ」（弥勒賛）　・青氛氲　王琦の注に「青氤氲」とする。意味は同じ。楽府詩集の注などが「過清氛」とするが、よくない。青い気の盛んなさま。岑参「衣

裝と枕席と、山靄碧氛氳」（高冠谷口招鄭鄠）　・この句は細雨に湿って青葉がいっせいに匂うのだが、妖冶なイメジが依微としてほのめく。

○四〔膩葉　蟠花　曲門を照らす〕　・膩葉　じっとりと厚い葉。　・蟠花　うずだかく重なり合った紅の花。　・照曲門　曲がり路の門べに燃えている。　・陳本礼は「膩葉は狭邪の熱逕にして、蟠花は門裏の人の家」といった。これをすこし修正すれば、愛する女性の肉体の幻影、ということもできよう。

○五〔金塘の閑水　碧漪を揺がす〕　・金塘　鏡のように美しい、金色の池塘。劉楨「菌苕金塘に溢る」（公讌）　・閑水　閑静な水。閑を毛氏本などは「閒」とする。音義ともに同じ　・碧漪　みどりのさざなみ。しずかな水がふいに揺れると、幻影が消え、紺碧のさざなみが波紋を描くだけである。ヨーロッパの民話には、水鏡が夢と現実との境をなす物語があるが、この句がその役目を果たしている。

○六〔老景　沈重　鶩飛する無し〕　・老景沉重　夢想から醒めた眼を迎えるのは、春の重くるしく沈んだ、老いた風景だった。沉重を呉正子注は「沉帖」とするがよくない。　・無鶩飛　かつてはともに楽しんだものを前にしても、もはや飛び立つさまも見せぬ。鶩飛の「鶩」は、王維「月出でて山鳥驚く」（鳥鳴磵）の鶩にそっくりだ（拙著『中国詩人選6王維』参照）呉正子が「春景已に老い、鳥獣孳尾の時にあらず、また雄飛び雌従い林間を遶る無し」というのは解釈としてやや重苦しいが、王琦のように「花の飛舞」とするよりは、この句の趣きに近い。

○七〔堕紅　残萼　暗に参差〕　・堕紅残萼暗参差　地におちて泥にまみれた紅の花と、なお枝に残って花びらを失った花ぐきとが、ほのぐらい暮景のうちに、ちぐはぐなわびしさを抱いて、たがいに面そむけたげに、うちくずれているのである。詩経「参差たる荇菜」（関雎）

（一〇二八）五月

五月

彫りあげた玉で　簾を押さえ　〇一　雕玉押簾上

あいた門に　軽いクレープを張る　〇二　輕穀籠虚門

湧き井から汲んだ　化粧の水　〇三　井汲鉛華水

扇に織った　鴛鴦の紋　〇四　扇織鴛鴦文』

涼しい御殿に　吹雪舞い　〇五　廻雪舞涼殿

空の緑を　甘露が洗う　〇六　甘露洗空緑

うすぎぬの袖　ひるがえり　〇七　羅袖從徊翔

香ばしい汗　濡れた宝石の粟粒　〇八　香汗濡寶粟』

〇一〔雕玉簾上に押し〕　・雕玉　屈原「白玉を鎮となす」（湘夫人）の白玉にあたり、雕は彫と同じで彫刻のこと。今でも掛け軸などを安定させるための風鎮に彫刻を施した玉が使われる。司馬相如「彫玉の輿に乗る」（子虚賦）　・押簾上　押はおさえることだが、簾に掛けるのだろう。押簾を楽府詩集の注は「簾枰」とするがよくない。簾上を宋蜀本などは「簾額」とする。簾額は、すだれのことだから意味の上では変わりはない。賀は「宮娃歌」（二〇九六）にも「彩鸞の簾額霜痕を著く」という。

〇二〔軽穀虚門を籠む〕　・軽穀　軽く薄い絹のカーテン。曹植「軽穀の織羅を被る」（七啓）穀は、ちぢみ絹だが、ここのは同じ七啓にみえる「紗穀」や、宋玉「霧穀を動かして以て徐歩す」（神女賦）の霧穀にあたる。　・虚門　あけはなした門。陰暦の五月は盛夏である。窓の戸を除いて簾を掛け、部

屋の入り口の扉を開かずにはしのぎにくい。そこで宮室を涼しげにととのえさせた。

○三〔井に汲む　鉛華の水〕　・鉛華　白粉。そこに住む女性が、金井から冷たい水を汲み上げて化粧する。曹植「鉛華御せず」（洛神賦）

○四〔扇に織る　鴛鴦の文〕　・鴛鴦文　文を錦嚢集などは「紋」とする。意味は同じ。鴛鴦の模様を織らせた扇を手にして、舞いの準備はととのった。鴛鴦が男女相愛の鳥であることは、言うまでもない。

○五〔廻雪　涼殿に舞い〕　・廻雪　廻を楽府詩集などが「回」とする。意味の上では同じく、翻り舞う雪。張衡「袖は廻雪の如し」（舞賦）。曹植「飄飄として流風の雪を廻らすが若し」（洛神賦）　・涼殿　子夜四時歌「冶遊して涼殿に戯る」（夏歌）涼を宋蜀本などが「凉」とする。

○六〔甘露　空緑に洗ぐ〕　・甘露　甘美な露。老子「天地相合して、以て甘露を降す」（三二）司馬相如「甘露時雨」（封禅文）また梵語 amṛta（神々の飲料）の漢訳として仏教諸経典に愛用された。法華経「甘露を以て灑ぎ、熱を除いて清涼を得しむるが如し」（授記品）　・空緑　西洲曲「簾を巻けば天自ずから高く、海水空緑を揺する」

○七〔羅袖　徊翔に従ね〕　・羅袖　うすぎぬの舞衣の袖。袖を楽府詩集などの注が「綬」とするが、よくない。　・徊翔　まつわるように飛びめぐる。沈約が「双心一影倶に徊翔し、情を吐いて君に寄す君忘るる莫れ」（四時白紵歌）というように、賀の作でも、舞姫の影に、姿を現さぬもう一人の心が、その徊翔に従っているのだ。徊を、曽益などが「廻」とし、楽府詩集の注が「鳳」とするが、誤り。

○八〔香汗　宝粟を霑す〕　・香汗　いい匂いの汗。梁簡文帝「簟文玉腕に生じ、香汗紅紗を浸す」（詠内人昼眠）　・霑　明本などが「沾」とする。音義同じ。　・宝粟　宝石を粟粒のように点々とちりば

める。汗の形容。呉均「宝粟金虫に鈿す」（和蕭洗馬子顕古意六首二）寶を、一本に「寶」とし（陳弘治注）、粟を、朝鮮本が「栗」とするが、ともに誤り。・少年の恋情が磨き上げた碧玉のような詩だ。

※前号正誤　第一六七号　一頁　一三行　天安寺蔬歳圃堂　→　天安寺疏圃堂

島田虔次と西順蔵

1995 05 14　原田憲雄

雑誌『颱風』第三〇号を贈られ「島田虔次先生自述」を読み、しばらく後に別の人から『西順蔵　人と学問』（西順蔵著作集別巻）を贈られた。前者は『颱風』同人の問いに答える談話を話者が校訂し、後者は、死後十年の西氏を六〇名ちかい知友や親族が回想評論する。形式、規模などまったく違うけれども、二氏が中国の思想史と深く関わり、個性著しい人格であることが、両方の記述から伺える。

島田氏は、中学生でエスペラントと左翼運動に近づき、配属将校に憎まれ、中国青島の中学に転校、そこで中国人の運動家たちとも交渉が生じ、ただ一つエスペラント部のある第三高等学校に、その部の人の好意で入学できることになり……といった話が淡々とユーモラスに語られる。

「西君は……常に本質に向かって進まないではいられなかった。そのため、若い優れた中国研究者がおのずとその周りに集まって」とある人がいい、「西氏からは私の『若さ』というよりも私の『軽薄さ』をたしなめるような（と感じられた）ことばがあり、私は西氏に対して初対面から畏怖、または、畏敬の念をいだくことになった」と、ある人がいう。

世間狭い者には、著書によって識るだけの一方的な知り人のほうが多い。そうして、一方的で済んでいるから、知った気になり、親しみさえ持つのだが、まんいち面接交渉をもったとき、その「知った」や「親しみ」が、自らのなかでどうなるか、相手からどう感じられ判断されるか。あやふやな生き方をしているわたしには、そんなとりとめもない感想がまず浮かぶ。人と人との付き合いがそうなら、人と物、人と事との交渉においても、同じ危機があるのではなかろうか。

〈藍色の服を着た女学生たちが、しゃべりながら、鞠を蹴りながら、道を歩く風景、それに対する情感が、自分の中国に対するセンチメントの中核をなす〉長い談話のほとんどすべての細部を、一週間たたぬうちに忘れてしまったが、島田氏のこの感想だけがくっきり、記憶にのこる。

西氏を語る文章にも衝撃をうけ、自分の今しているすべてが、愚劣きわまりないものに見える。

ところで、ある時期の西氏はしきりに「お住持になりたい」といい、但馬のぼろ寺に見学に行き、そこの坊さんから、「こういうところで暮らすには案外金がかかるものですよ、退職金は全部もってきてください。またお勤めはしっかりできますか」などと実務的な質問をうけ、以後「お住持になりたい」と口にすることが無くなった。という挿話があって、ほっとした。ほっとしたというのは、氏のように自らに厳しい人でも、休みたいときがあり、休憩の場所として「ぼろ寺」とその「住持」という位置が選ばれたことに対してである。それにしても、小さな寺の住持として日々さまざまの瑣事をみずから処理せねばならぬ者からすると、世の人にとっての「お住持」とはいったい何なのか、と思えたりもする。

エスペラントは希望を持つ人の言語である。山寺は放浪する哲人の理想の隠れ家であった。しかし希望の思い描いた言語は現実の人間の世界に根づかず、哲人の夢みた山寺はすでに地上から消滅した。

ハナアブ

1995 05 06

原田慶

タラヨウの花が
びっしりと咲いた
朝早くから虫たちが集まり
羽音の響きが
地を鳴らしてかすかに伝わってくる
小さな星屑のような花が
たえ間なく散り
根もとが黄色に染まる

ジョン・ゴールズワージイの「リンゴの木」を
むかし英語の時間に読んだ
青空を背景に
丘から降りてくる少女メガン
吹きあげる若葉とリンゴの花と
物語のはじまりはあまりにも美しく
メガンは小さな流れに顔を伏せて死んだ

小さなハナアブたちは
タラヨウの花の香を
羽根ふるわせてかきたてる
まっ赤にむすぶ秋の実のことなど

どうして知るだろう
日ごとに
花は降り積もる

鳩よ

1995 05 01

原田慶

雨が降る
透きとおる朱色のクルミの若葉の間から
みどりの花穂がゆっくりと降りてきた
草むらのオダマキの花は
うす紫のしずくを落としている
電線に止まって
こちらを見おろしている鳩は
なにかの影のようだ

いつまでも黙って
動こうとしない鳩よ
何故かわたしもこのようにおまえの前に
立ちつくしている
人々の気配は遠くひそやかで
わたしたちをつつんでただ
雨が降る

駅の広場

1995 05 16

原田慶

駅の貨物置場だったところが
空地になって
街の中のそこだけ空が広いので
夕陽の沈むのがよく見えます

去年の春には
サーカスがテントを張っていました
象のいるのが
バスの窓からも見えましたが
なんだかひっそりと手もちぶさたで
見物の人はまばらでした
わたしは子どもの頃にそのサーカス団を
何度も見たことがあります
ブランコも綱渡りもオートバイ乗りもみごとでした
サーカスが行ってしまったあとは
もとどおりの空地になって
また街のむこうの遠くの山へ

太陽が沈みました

今年の春は
一面にうまごやしが咲いています
サーカスの動物たちが種を播いていったとでもいうように
そしてまわりを囲んで咲いているのは
オニタビラコの黄色です
白いうまごやしの花輪を編んで
縄飛びをする子どもたちのことを
うたった詩を思い出しました

駅の空地には柵が巡らされ
子どもは入ることができません
この春は雨つづきで
太陽があまり見えませんでしたので
お祭りも中止になりました
その夕方のことです雲の間から
突然に陽の光がまっすぐ射してきました
わたしは手を振って
「おひさま元気ですか」
と言いましたが
間もなく光は雲に隠れて
気がつくと夜でした